

## 望ましい子育て支援活動のあり方の探究

小島 千恵子

### 1. はじめに

本研究は、第31号・第32号の紀要で発表した研究の継続研究として、子育て支援の活動実践から見えてきた問題や課題を整理し、望ましい子育て支援活動とは何かについて考え、新たな方向性について検討を加えたものである。

1994年に策定されたエンゼルプランの中に「子育て支援」という言葉が誕生して以後、「子育て支援」という言葉も当たり前に使われるようになった。まさに市民権を得たこの言葉で、子育て支援に関することはすべて表されるようになり、簡単に使う傾向がうかがえるが、子育て支援がはじめた原点に立ち返って考えると、子育ては、特別なものなのか、子育て支援は誰のためのものかなど、新たな疑問が生まれ、あらためて真の子育て支援とは何か考え、現行の子育て支援についての問題や課題がみえてくる。

鯨岡(1997)は、「子育てはもともと分からないことを含み誰かに援助を期待せざるを得ないものである。これは援助する側にとっても生きるという大切な営みに相違ない。新しく親になった人の両親やそのきょうだい、あるいは近所や地域の人たちなど、子育ての経験を持つ人が行ってきたもので、経験の引き継ぎという性格を持ち、文化の世代間リサイクルという性格を持っているが、昔のように自然な形で子育ての支援ができなくなった現状がある」と、子育て支援が生活の中で、自然な形でリサイクルされない現状を意図的に行い解決していくことが必要であることを示唆した。このような現状を解決するために各自治体は、「子どもを安心して産み育てられる街」などの事業を掲げ、子育てをみんなで支えようという取り組みがされ、少子化にストップがかからない現状からも、この政策は継続され続けている。

また、子育て支援活動のひとつである子育て広場や子育てサークル誕生の原点は、子どもの遊び場が少なくなり、遊びの形態が変化してきて、戸

外遊びをしなくなったわが子に危機感を感じた母親たちが相談し、戸外に連れ出して集まったということが、活動のはじまりだったという(原田2002、小木ら2004、寺田2005)。現在では、「つどいの広場」の実施にみるように、入園する前の子どもを持つ親子が気軽に集える場所の提供は、さまざまな形で行われており、子育てをはじめた母親たちが当たり前のように利用し、その時々で行く場所を選択できるほどになっている。

子育ては、楽なものではないが決して特別なものではないと考える。鯨岡が述べているように、子育てはわからないものということを含み、誰かの援助を期待せざるを得ないことはその通りであると思うが、「子育ては助けてもらうのが当たり前のこと」になっていないかという疑問がわいてくる。

子育て支援がめざすもののひとつに、子育てによる孤独感や閉塞感を開放して、育児不安などから起こる様々な問題を予防することがある。児童虐待ははまだ減少しておらず、虐待防止法の浸透から発見されやすくなったということも含めて、むしろ増加傾向にあるだろう。児童虐待は、母親によるものが多いという印象があるが、最近では、父親が「泣き止まなかったから」という理由で虐待していたというケースなどもある。父親のひとり親家庭が増えている現状からも、今後もこのようなケースが増える可能性は高くなることが予測される。このことは、子育て支援という言葉が生まれた頃から示唆されていた。柏木・若松(1994)は、3~5歳の幼児をもつ父親・母親346対に対して、質問紙を配布して調査した結果から、母親と父親の育児行動の差が産む性か否か、女性・男性の違いによるものではなく、一次的育児責任を負っているか二次責任を負っているかによって異なることを明らかにしたField(1978)の知見とも合致し、子どもへの感情は、産む性ならではないものではなく、育児責任を負い育児に多く関与

することによって規定され形成されるということを示した。

この結果から、柏木・若松（1994）は、子どもや育児への感情は、母親・女性固有のものではなく、育児の体験の中で形成され変容すること。育児不安といわれるものが育児や子どもそのものについての不安や悩みではなく、「やりたいこと」「将来の生活」と育児や子どもの存在とが葛藤・対立している状況の反映であること示した。このことから、子育ての孤独感や閉塞感は、母親、父親に限らず、ひとりで子育ての責任を負担することで、誰もが感じることであることがわかる。

柏木（1993）は、日本の「父親不在」の育児状況の問題性と父親の育児参加の重要性について、述べている。その頃から20余年経過した今、「イクメン」「カジメン」「イケダン」と称される、父親の育児参加はほぼ通常のこととなったが、ここでは、育児は誰がするという論議ではなく、育児責任をひとりで背負わないで分担することが、重要なポイントであることを確認しておきたい。

また、柏木（1993）は、これに加えて、育児参加は、子どもにとって重要であるばかりか、親自身の発達にも資すること。子育てという営みは、社会的職業的体験とは全く異なる体験であり、それは親の人格的発達を促すものであると述べている。人（子ども）を共に育てるという営みの中でいろいろな体験をし、人とのコミュニケーションを取らなければならないことから、さまざまなことに気づいていくということであろう。

以上のように本稿では、紀要31号で述べた子育て支援活動の考え方を基にして現在に至るまで行っている活動実践（紀要32号）から、子育てを支援する活動について、親子関係に焦点をあて、子育て、親育ち、という視点で捉えた望ましい子育て支援活動のあり方について検討を加え、新たな課題や方向性を導き出していきたいと考えた。

## 2. 親子関係の問題と子育て支援活動の考え方

32号の紀要でも述べたが、子育て支援政策の誕生から未就学児への支援は、発展し続けている。待機児童の問題は、容易に解決されないものの、保育所や幼稚園に入園してからも、手厚く積極的

に行われている。それに比べ、就学後の子育て支援のネットワークの目は粗くなってしまいう現状があり、その悩みや不満を訴える親たちが少なくない。

児童館活動や放課後子どもプランのように、子どもが放課後過ごす場所はあるが、親あるいは、親子が気軽に集える場所の提供は少なく、親が子育ての相談をしたり、悩みを話したりする場所はほとんどないと言っていいだろう。特に小学校1年～3年生は、塾やお稽古ごとに通う以外には、所属するところは少なく、放課後家庭で過ごすことが困難な子どもについては、学童保育所へ入所できるが、すべてに手が届いているわけではなく、母親が短時間労働、いわゆるパートタイムで働いていると、学童保育所への入所はできない現状がある。また、就学と同時に親は、子どもへ『自立』を求め、ことに学童保育所入所については、使用料もかかるため、親は子どもに「大きくなったから、留守番しなさい」と言い聞かせ、保育所、幼稚園を卒園したとたん鍵を持たされて、「かぎっ子」になるケースも少なくない。

同時に、子どもが就学すると『自立』を名目に親は、子どもと間に距離を置き始める傾向があり、子ども同士で遊ばせることを選択することが多くなる。放任傾向にある親も少なくない。親子活動に参加することもあるが、子どもの活動が中心で、親は参観していることが多い。一方では子離れできず、いつも傍にいて世話を焼く親もいる。それは、過干渉へとつながるケースもある。このように親子関係も二極化傾向にあり、適切な親子の距離を取れない現状がある。この状況は、子どもを取り巻く問題の根っこになっていることも多く、児童虐待などはその一つであると考えられる。

児童虐待は、乳幼児に多く発見され報告されているが、入学後も続いているケースがあり、引き続き観察が必要である。このようなケースは、地域の虐待防止のネットワークなどで継続ケースとして見守られているので、対応しやすいが、虐待の予防や新たなケースの発見については、入学すると親子関係が見えにくくなることや、状況が複雑なものも多いため、発見しにくく、子どもへのフォローや親の対応も難しい。

親との愛着の発達、子どもの人間関係の基本

になることは、ボウルビィのアタッチメント理論でもよく知られている(1964)。アタッチメントは乳幼児期に限定されたものではなく、大人になっても認められるという(ボウルビィ1993)。この考え方からも、子育て支援活動は、入学後も必要であり、子どもが思春期を迎える頃を見据えての子育ての支援を考えていく必要があるだろう。このようなことから、小学校入学後もしくは、親が気軽に子どものことで相談ができたり、親子が共に参加し、一緒に遊んだりして過ごすことのできる場所が必要であると考え。しっかり愛着形成されていて、「親離れ」、「子離れ」という自然な形で距離が取れるようになることが望ましいが、愛着形成されないままに子どもが成長し、思春期、成人期になって、親と子どもが適切な距離が持たず、親子関係がうまくいかないことはよく聞かれる話である。また、親が社会化できず、子育てに偏りが見られることもあるため、地域社会が見守っていく必要があるだろう。親も子どもも、それぞれが生活する中で出会う様々な人たちと関係性を築き、社会の中で自立していくことが望ましい。それが世代間でリサイクルされるように互いに支援し合いたいものである。

親が子どもと向き合い、子どもと適切な距離を保ちながら自信を持って子育てしていくことができるようになることが、社会の願いであり、子育て支援の目標であろう。また、それが子育て、親育ちにつながっていくものであると考える。そして、この考えを実践していくために、親が自ら、精神的なゆとりをつくり、自信をもってゆったりと子どもと向き合うことが必要であると考え。そのためには、親と子どもが同じ「空間」で、同じ「時間」を過ごし、いろいろな「仲間」と遊びながら楽しさを共有することが必要であり、共通の話題で会話することで、親子の関係性が深まり、親の生活も子どもの生活も豊かになるだろうと考えた。また、そこで出会う、親でも先生でもない第3の大人「人」が、親子の共通の知り合いとして意識化されることで、地域の中で人の輪ができ、これも親子が会話する時の話題になっていくのではないかと考える。このことで、親子が社会化することができ、地域でのコミュニケーションが深まったり、地域の危機管理にもつながったりして

いくのであろうと考える。

### 3. 親子の活動実践からみえる活動の視点

現在行っている、社会福祉法人T市社会福祉協議会(以下社協)主催の「夏休み子どもプレイスペース」(以下「プレスぺ」)は、市民団体の任意活動から6年が経過した。この活動の始まりは、2006年6月、小学校に入学させて初めての夏休みに子どもを預ける場所に困った母親からの相談を筆者が受けたことにある。筆者は当時、T市の総合ボランティアセンターでボランティアコーディネーターをしていた。相談者は、若者のボランティアに有償でもいいので、母親が仕事に行っている半日間、留守番している子どもの遊び相手になってほしいというものであった。この状況は、筆者が保育園勤務や児童センター勤務時代にも目の当たりにしてきたことである。児童センターは、小学生以上が、親同伴でなくても午前9時～午後6時まで遊ぶことができる。児童センターを利用者の中には、母親が仕事に出かける前に、センターに送り、仕事が済むと迎えに来るというように、母親がセンターを託児所代わりに利用するというケースもある。もちろん児童センターには託児するという機能はないため、このようなケースについては、保護者に理解を求めているところが多い。子どもを預ける場所として他には学童保育所がある。学童保育のはじまりは、まさしく子どもを預ける場所に困った親たちの草の根的な活動によるものである。学童保育所も数が足らず、筆者が今回関わったケースと同様のことが常に起こり、困った親が自力で学童保育所を立ち上げるということが繰り返されてきた。親同士の話し合いがうまくいかなかったり、運営が厳しいため、子どもと一緒に生活する指導員への報酬も少なく、その要員を探すのも困難であったりするようだ。報酬が少なく指導員の生活を保障できない現状があるため、学童保育に思い入れがある指導員がいたとしても、指導員に専念することは難しく、人材の減少を引き起こしているようである。

このように小学校入学前までは、親が仕事を持っていれば、常勤、短時間労働に関係なく、申し込みをすれば、保育園に子どもを預けて安心して働くことができる。しかし、小学校へ入学した途端

その状況は一変する。常勤で働く母親は、入学前から、学童保育所への入所など、子どもの生活の仕方を考え、準備することができる一方、短時間労働をしている母親は、入学後の短縮授業期間や、夏休みのような長期休暇の間は、仕事を一度辞めるか、その間については仕事を休むという選択をせざるを得ない。これら、子育てを支援するという政策の現状をみると、子育て、親育ちを考えると、親子関係について考えるというよりは、「親が働きやすくなるために」という視点で政策が進められているということがみえてくる。親が子どもを安心して預けることで、働きやすくなることは確かであるが、真の子育て支援政策とは言えないのではないだろうか。

就学前の子育て支援活動に参加している親の姿を見ると、一生懸命子どもと向き合っている。子どもの年齢が上がるにつれて、その姿は参観へと変わり、入学すると親と一緒に遊ぶという姿は、学校の行事や地域のイベント以外あまり見られなくなっている。通常の生活の中で、親が子どもと共に何かに夢中になって楽しむということができないという現状がうかがえるのである。現在行っている夏休みの親子活動を見ても、親子で一緒に遊ぶという企画を立て、親をこまめに誘い込む努力をしても、親は参加せずに、体育館の隅で親同士世間話をしている姿が多くみられる。

多くの親は、親同士のおしゃべりがしたいという様子がうかがえたが、一部の親にその理由を尋ねると、「親と一緒に参加すると、親に頼るので、あえて引いている。いろいろな友達と関わって、たくさんの経験をしてほしいから」と話した。日々の生活に追われて、普段ゆっくり親同士で話す時間が持てないのだろうということが推察できるし、これも親にとって、大切な情報交換の時間であろうということが予測される。このような現状から、これからの望ましい子育て支援のあり方を考えると、子どもの年齢や親の生活状況、子どもの立場、親の立場などそれぞれへ対応が必要になる。もちろん、個々にそれぞれ支援していく必要はあるが、親子が共に、あるいはそれぞれに、将来的に社会の中で生き抜いていく力を育み培っていくことを考えると、集団の中でいろいろな人と関わり、さまざまな刺激を受けて、いろいろな

経験を積み重ねることで生きていくための人間関係を身につけていく必要があるだろう。しかし、その基礎である親子関係が崩れてしまうと親自身だけの力では修復できないことも多いようである。

現在筆者が取り組んでいる夏休みの活動を通して筆者は、子育て、親育ちを目的にして子育て支援を実践する時に必要なポイントを次のように考えた。①時間と場所の共有。②仲間の共有③活動内容の共有である。一般的に言われている、遊びが成立する「3間」時間・空間・仲間の考え方が、子育て支援活動を行う時にも必要なポイントとして考えられるのでこの「3間」について具体的に考えていくことにする。

### ① 時間・空間の共有

社協が主催するプレスを立ち上げた時、実行委員で考えた活動の趣旨は、「託児ではない親子共有の自由な活動場所」であり、地域、学校、学年に関係なく、ひとつの場所での出会いをきっかけに、一緒に遊んだり、運動したり、ものづくりをしたり、おしゃべりをしたりしながら、自由に集える親子の空間づくりをめざすことである。地域で暮らす親子がいろいろな人と出会い、知り合いになって、心と心をふれ合わせ、つながっていくことの温かさ、大切さをこの広場でできるようにしていくことであった。親子が同じ時間、同じ場所に一緒に参加すること。そして、それぞれの親子が同じ場所で出会うことが、人との関係をつくり出していくことは言うまでもないことである。子どもが出会う共通の場所に「学校」があるが、「学校」という拘束される場所ではない場所で親子が出会うことに意義がある。前にも述べたが、子どもの成長に伴って、日常的に親と子が向き合う時間が減っていくことを考えると、まずは親と子どもが意図的に共有できる時間をつくる必要がある。「親子の会話が減った」と言われるならば、あえてその時間をつくる必要がある。その共有の時間は、親が子どもにお小言を言う時間ではなく、嬉しかったことや楽しかったことを話す時間にしたいものである。社会における人間関係は、ストレス関係で成り立っていることが多い。「親と子ども」「先生と生徒」「上司と部下」縦の関係は、人生の先輩としていろいろな

ことを学ぶよい関係であるが、人はそれぞれに気持ちがあり、価値観も千差万別である。言葉を交わすことだけで感情が動き、気持ちに浮き沈みが起こることは止めようもないことである。これは、社会に人との関係がある限り、当たり前になることである。

「学校」は、いろいろなことを学ぶ場所であることを、子どもも、教師もそれぞれが認識している。子どもは、教えてくれる人がいて、自分は教えられる人ということを実感し、互いに拘束され合っている場所であることもわかって生活している。この場所を親子で共有するのは難しいだろう。

親と子どもが対等の気持ちで向き合い、会話することは、難しいことではあるが、少しでも拘束された意識がない空間で、一日のうちで一時でも親子で共通の話題で会話する時間を持つことが適切な親子関係をつくる重要な鍵となると考える。日常の親子の生活の様子をうかがうと、親子が一緒にいる時間は、子どもの年齢が上がるほど、わずかなことが予測される。時間・場所の共有は、親子で楽しく会話する話題を共有化し、会話する機会の増加を促すことにもなると考える。このことで、親子の関係性の深まりにもつながっていくことになると考える。

「プレスぺ」の活動でも、夏休みの活動後、親へのアンケート調査(複数回答)で「子どもを叱ることが減った(69%)」「共通の話題でよく話すようになった(51%)」という回答があった。親子共通の話題をつくるためにも、共有された時間と空間をつくるのが大切であり、これは子どもの年齢が上がるほど、親子で一緒に過ごす時間が減る傾向にあることから、意図的につくっていく必要があるだろう。親子が自ら時間や空間を共有することが望ましいが、できない状況にあるならば、第三者が具体的に提供することを考えていく必要があるだろう。

ここで考える時間・空間の共有は、家庭でも学校でもないところで、持つことがポイントになることをつけ加えておきたい。

## ② 仲間の共有

「プレスぺ」の活動前の親へのアンケート調査(複数回答)で、活動に対して期待することにつ

いて聞いたところ、「子どもにたくさん友だちが欲しかったから(32%)」という回答があった。プレスぺは、校区を越えて全市的に行っているため、学校以外の友だちができる。毎年、いろいろな学校の子同士が友だちになり、プレスぺの活動以外でも遊ぶようになったと聞いている。「この前ね、□□スーパーで△△小学校の○○ちゃんにあったんだよ」と嬉しそうに話す姿が毎年見られる。一般のボランティアとして参加してくれる地域の人も、子どもや母親が声をかけてくれたと喜ぶ姿がある。

現代社会は家族が個人化したと言われる。その中で家族の本質的個人化として、「家族であること」を選択する自由、「家族であることを」解消する自由を含んでいる。親子でいえば、子どもが親を選んだり、親が子どもを選んだり、親子関係を解消するという選択肢が用意され、その選択が個人の意思に委ねられているという例をあげ、家族の本質的個人化は家族のリスクにつながることを示唆している(山田2004)。子どもが育つ場の状況を見ると、家庭の様々な状況において、支援の方法が分けて考えられていることが多い。家庭のいろいろな事情を加味しながらも、子ども側から考えると、一緒に集ったり、遊んだりすることは、家庭のさまざまな事情に左右されことなく、皆同じように、居場所が確保されなければならないと考える。子どもの生活の安全確保はもちろんのことであるが、安全だけにとらわれるのではなく、子どもにとって豊かな生活を保障するという視点を忘れてはならないと考える。子どもにとって豊かな生活とは、前述の時間・空間に加え、豊かな人間関係と地域とのつながりが考えられる。その基盤となるのが、家族のつながりであり、親と子ども(家族)の関係を地域とつなげていくのが課題であると考えられる。

プレスぺの活動は、6年目を迎えた現在は、社協の市内広報誌で参加者の公募をして、申し込みのあった親子から、およそ60組の親子を抽選で選んでいる。公募で集まった60組の親子(対象は1年~3年生)に加え、4年生以上は、活動ボランティア(ジュニアリーダー)として参加を募っている。これに加え、参加対象者のきょうだいである未就学児、中学生、大学生、一般ボランティ

アの参加がある。登録制で、参加は自由、子どもと大人を合わせて、毎回 100 人弱の参加者が活動をしている。大所帯化して関わりがうまくいかなくなっていく現状があり改善をする必要性はあるが、子どもも大人も日頃ふれ合うことのできない人たちと関わりが持てることでよい刺激になっている。

2010 年、2011 年は、親で組織する実行委員に加え、学生の実行委員を組織し、学生企画を多くして、親の負担軽減を図った (Fig. 1 活動の組織図参照)。社協の担当と活動コーディネーター (筆者) を中心に親の実行委員と学生のチームリーダー、ジュニアリーダー代表 (中学生) が活動の核となり、参加者を 2 チームに分けて活動を進めた。ジュニアリーダーには、対象児童との分けをするために、社協担当がついて、ジュニアリーダーの代表を中心に、活動の準備、片付けなどの役割を果たせるように導いた。親の実行委員の役割を明確にし、組織する者が、役割認識が持てるように仕事を分担して活動展開した。

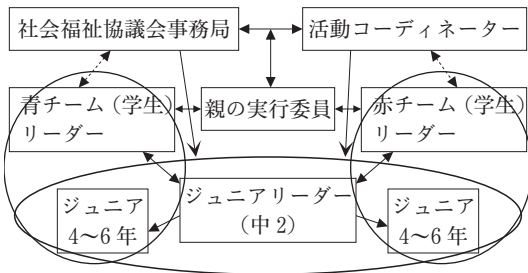


Fig. 1 活動の組織図

この組織の中で活動に参加することで、この活動のもう一つの目的であるジュニアリーダー育成の軸をつくり、子ども社会のつながりを持たせた。異年齢の子どもが互いに刺激を受けて成長していく縦の社会の形成を考えた。参加対象である 1 年～3 年は、ジュニアリーダーに、ジュニアリーダーは、ジュニアリーダーの代表と大学生に憧れ、ジュニアリーダーの代表は、大学生に、大学生は母親及び社会人から学ぶというサイクルを考えて実践してきた。ジュニアリーダーたちの成長はゆっくりとした歩みではあるが、活動の流れを見ながら、自分たちが次に何をすればいいか、先を見通し

て動いたり、率先して、未就学の子どもと遊んだりする姿が見られ、着実に成長している様子がかがえた。

ジュニアリーダーの代表は、5 年生の時に初めて参加し、現在中学 2 年生である。初めての参加は、母親に促されてのものであったが、現在は自主的に参加し、学校行事がない限り毎回参加し、ジュニアリーダーの中心となって活動を動かしている。家庭では一人っ子ということで、小さい子どもと遊ぶことが苦手であると自称していたが、今は、1 年～3 年生の子どもがついて歩くほど、密な関わりが持てるようになり、遊ぶ姿もたくましくなっている様子がかがえる。

活動内で関わりを持つ子ども同士、あるいは、大人と子どもについて、親子で参加するということもあり、関わる人のことを親子で共有することができる。これも親子共通の話題として家庭内に持ち込まれ、親子関係の深まりに一役買っている。それは次のようなエピソードからうかがうことができる。活動に参加している A ちゃんは、社協の担当のことを、会社から帰宅した父親にプレッスには、面白い人がいると話していると、担当のことを知っている A ちゃんの兄 (ジュニアリーダーで参加) が話に加わり、さらに、担当のことを知っている母親が話に加わって、会話が弾んだそうである。父親だけが担当を知らないということで、「是非会ってみたい」ということになったそうである。そこでその父親は、活動の最終日のイベント (流しそうめん、バーベキュー) に何があっても参加して、その人に会うことに決めたという。イベント当日、その父親は、社協の担当のところに行って、「あなたが〇〇さんですか? 娘がいつも〇〇さんのことを話して聞かせてくれます」と言ったそうである。活動に参加する大人は、それぞれに持ち味があるので、すべての人が子どもに好かれたり、母親に話しかけられたりはしないかもしれないが、親子が共有する「人」はとても重要なポイントになることが推察された。

### ③ 活動の内容

時間・空間・仲間の共有に加え、活動の内容にも、親子が積極的に親子の関係性を深める要素があると考えるので、親子活動の内容について取り

上げ、検討していくことにする。プレスベに参加した子どもも親も、事後のアンケート調査で様に「楽しかった(100%)」と回答し、親は、「有意義な夏休みであった(98%)」とも回答している。何がどのように有意義であったのか、楽しかった活動について尋ねた。

活動内容は、次のとおりである。

2008年度：雑巾・うちわ作り/パステルアート/体を使った遊び/英語遊ぼう/福祉の話/しっぽとり・紙で遊ぼう(学生企画)

2009年：パステルアート/紙合戦・泥警(学生企画)/プール遊び/母親の料理教室/福祉の日(車椅子体験、アイマスク体験)/体を使った遊び/ミニ運動会(母親実行委員企画)/紙で遊ぼう

2010年：Tシャツづくり/車椅子、アイマスク体験/食育セミナー(母親のカレー作り)/親のパン作り教室/猛獣狩り・魔法のじゅうたん(学生企画)/プール遊び/ミニ運動会(母親実行委員企画)/ダンス、手話の発表。

2011年：Tシャツづくり/社協と遊ぼう(車いす、アイマスク体験/体を使った遊び)/プール遊び(アソベルガーの児童との交流)/親・親子パン作り/学生企画：風船遊び、作って遊ぼう、紙漉き他/ミニ運動会(母親企画)。

以上2008年、2009年、2010年の活動の中で楽しかった活動(年代毎で親子別上位3つの比較は、Table 1に示すとおりである。

Table 1 親・子の人気の活動内容

	1	2	3
2008(親)	体を使った遊び	パステルアート	紙で遊ぼう
(子)	ドッジビー	パステルアート	しっぽとり
2009(親)	紙で遊ぼう	ミニ運動会	パステルアート
(子)	プール遊び	ミニ運動会	紙で遊ぼう
2010(親)	Tシャツ作り	親のパン作り	食育セミナー
(子)	プール遊び	泥警	猛獣狩り

※2011年はアンケート回収中である。

アンケートでは楽しかった活動を3つ記入してもらった。パステルアートは、好きな色のパステルを使って塗る。紙で遊ぼうは、体育館一面に紙を敷き描画、最後はちぎって遊んだ。ミニ運動会は、綱引き・追いかけて玉入れ・リレー等行った。

その活動がなぜ楽しかったのか尋ねたところ、

親の回答では、親子で家庭ではできない活動あるいは、知識が増えたという回答が多かった(60%)。子どもの回答では、友だちができた(46%)あるいは、学生と一緒に遊べたこと(52%)という回答が多かった。

活動を通して親子に変化があったかどうか尋ねたところ、共通の話題でよく話し合った(72%)。子どもを叱ることが減った(69%)。汗を流して思い切り遊び笑顔が多くなったように思う(46%)。という回答が多かった。

事後アンケートの楽しかった活動とその理由についての調査項目を検討した結果から、親子共通の楽しかった活動の要素について考えてみると、次のとおりである。①単純でわかりやすい。②体を動かす。③協力できる。④インパクト(活動内容・人)がある。親子関係の基が楽しいことを共有することであると考えると、親子の関係性を支援する活動には、上記4つの要素が入った活動を提供することが必要であると考えた。

活動の内容について、事後アンケートで、活動の内容で参加の日を決めたかどうか尋ねると、67%の親が内容に関係なく参加したと回答している。さらに、活動の内容について事前に分かった方がよいか尋ねたところ、60%の親が「わかった方がよい」と回答し、その理由を尋ねると、「参加する日を決められるから(46%)」「楽しみができるから(34%)」という回答であった。この調査結果には、矛盾があるが、活動内容については事前に内容がわかれば、わかった方がよいが、事後活動をふり返ると楽しかったので、特にわからなくても参加するというような親の気持ちの変化がうかがえる。

プレスベの活動は、事前説明会に参加すること。活動中、初回オリエンテーション、最終回のパーベキューを除いて、1回以上親も参加するという条件がある。オリエンテーションにおいてこの活動は「託児ではなく、親子で夏休みの思い出をつくるという活動である」ことを説明し、その趣旨に賛同し、条件を満たすことができる人が申し込むことができることにしている。活動開始当初は、毎回参加し、子どもと活動を楽しむ親の姿が多かったが、年々親の参加の数は減少する傾向にある。今一度、活動の原点に立ち返って考え、活動存続

について検討することが必要であるが、親子が楽しい活動を共に経験し、共通の話題で語り合うことができたなら、そこには親子の笑顔が溢れるであろうと予測される。現状においてもプレスベに参加した親子は、活動が終了すると、「楽しかった。来年もまた参加したい(89%)。」と口々に言っている。この結果を見る限り、活動を続ける方向で趣旨賛同して参加する親とよく協議しながら、活動の内容を考え、検討を重ねていく必要があるだろう。

#### 4. おわりに

紀要第31号で、「子育てを楽しむこと」について、現行の親子参加型の子育て支援活動から検討を加え、日々の生活の中で、「子育ては楽しい」という親が増え、それが、普通の生活の営みとして次世代に受け継がれていくことが、真の少子化対策であり、子育て支援なのではないかと考察を加えた。さらに、その方法について、考え方をモデルに示し提案した。紀要32号では、紀要31号で示した考え方が生きる子育て支援の具体的方法を導き出すために、筆者が2006年から取り組んでいる地域の活動を実践研究の経過をまとめた。実践研究は、具体的に取り組み始めて今年の夏で6回目をとなった。今年は、これまでの活動について検討を重ね、夏休みの期間中の週2回開催で、学生との自由な交流がもっとあるとよいと願い、週1回を午後3時までとして、時間の延長を試みた。子どもと学生は、関係性を深めることに有効であったが、時間をのぼしたことが親の気持ちの解放を促したようで、託児化の傾向が見られた。

主催する側としての願いは、親も一緒に学生を交えて、話をしながら子どもの宿題を見るというような、ゆったりとした時間が持てることを願ったが、今年はこの意図が親に通じなかったようである。どのような活動にするとよいのか、親の思いをどこまで汲み取るのか、子どもの育ちを考えた時、どこまで親に要求できるのかなど、取り組むほどに、子育て支援のあり方について、わからなくなるのが現状である。

親子が適切な関係性を保ちながら生活していくためには、親子が拘束されない空間で、共有された時間を過ごし、同年齢、異年齢の友だちを親子

で共有すること。地域の中で、親でもない、先生でもない大人と出会い、親子で出会った人を共有することがポイントになると考えた。活動内容は、できるだけシンプルで一緒に取り組む全員が「感動」して、盛り上げられるものを企画する必要があるが、活動のプログラムは気にかけるが、楽しく参加できればよいという親もいるので、活動の内容については、参加する母親に考えてもらい、実践していく方が、親の参加率も上がり、親の活動に対する達成感や親の育ちを望めるのではないだろうか。

子育て・親育ちの視点で考えると、担当やコーディネーターが準備しすぎること親の育ちを阻害しているようにも思われる。どのくらい客観的に見ながら、活動をサポートすることが必要なのか考えていくことが今後の課題になりそうである。また、学生がこの活動に参加することで、一人ひとりの成長は感じられるが、何がどのように学べるのかも整理する必要がある。

この活動は、人を育てる場としても有効であると考えるので、今後は、活動の記録を追いながら、活動から得られるものについて探り、保育養成の場でも活かすことができるようにしたいと考える。

#### 【引用文献一覧】

- ボウルビィ(1967) 乳幼児の精神衛生(黒田実郎 訳) 岩崎学術出版社
- ボウルビィ(1988) 母と子のアタッチメント—心の安全基地(二木武訳) 医歯薬出版
- 柏木恵子(1993) 父親の発達心理学: 父性の現在とその周辺 川島書店
- 柏木恵子・若松素子(2003) 心理学とジェンダー 「子どもの一体感」母親のものか 有斐閣
- 小島千恵子(2008) 子育て支援の現状と望ましいあり方の探求—母親のニーズと保育者の意識調査を通して— 椋山女学園大学大学院 人間関係学研究科 人間関係学専攻 教育学領域 修士論文
- 山田昌弘(2004) 家族の個人化 社会学評論第54巻第4号 日本社会学会

#### 【参考文献一覧】

- 庄司順一(2008) 保育の周辺—子どもの発達と心



理と環境をめぐる 30 章 明石書店

塚田みちる (2009) 乳幼児の自己調整の発達過程  
と親子関係の歴史—親の「こうしないで欲しい」を子どもが聞き入れるようになる過程—  
風間書房

**【付記】**

本稿は、名古屋柳城短期大学研究紀要第 31 号

「親が子育てを楽しむための子育て支援活動」及び第 32 号の「親が子育てを楽しむための子育て支援活動 (2)」を基にしてまとめたものである。日本保育学会第 64 回大会にて発表した「親子の関係性を深めるための子育て支援活動の実践に関する研究 (2) —「楽しい」と感じる活動の内容からの検討— (発表論文集 P862) の一部を取り上げてまとめている。

## Research on desirable aid-for-childcare activity

Kojima, Chieko\*

本研究は、紀要第31号・32号を基にして、望ましい子育て支援活動のあり方について検討し、考察を加えたものである。子育て支援がエンゼルプランに登場して20年余りが経過して、子育てを支援される、支援するのは当たり前になった。子育てはもともと周りの人たちに手助けされて、繰り返されてきた営みであるが、決して特別なものではないと考える。子育て支援の政策は、その時々の問題を受けて、日々練り直されてきているが、子育てや親子関係にかかわる問題や事件は一向に減らない現状がある。子育てが日常の普通の営みとして、親が自分らしいやり方で自信を持って子育てできるようにするための支援のあり方について、子育て・親育ちという視点で捉え、筆者が6年間継続して取り組んでいる、小学校1年～3年生の親子対象の子育て支援の実践を踏まえたうえで、子育て支援に必要なポイント（時間・空間・仲間の共有）を導き出し、そのポイントそれぞれについて、具体的に検討を加えた。「子育てが楽しいもの」になることをめざして、親子が適切な距離感を保ってより豊かな生活ができるようにしていくための方法を継続的に探るものである。

キーワード：子育て・親育ち，親子関係，楽しい遊び，子育て支援活動，時間・空間・仲間